

イザヤ7-9章7節「子による慰め」

1A 御救いの軽視 7

1B 無くなる恐れ 1-9

2B 主からの徴 10-17

3B 凝乳を食べる地 18-25

2A 御教えの軽視 8

1B 略奪 1-10

2B 暗黒 11-22

3A 暗闇の中の光 9:1-7

本文

午前にイザヤ6章を読みましたが、いつもと違い、そのまま続きを読んでいきたいと思えます。7章からです。6章において、私たちはイスラエルの民が、主のことばを聞かず、心を頑なにし、悟ることがないようになると主が語られたところを読みました。そのために、この土地には家々がなくなり、土地が荒れ果て、人々も十分の一が残ったと思えば、その残り僅かな民もいなくなることを主は語られました。しかし、木が切り倒されたその切り株から、聖なる末、子孫が出てくるという一筋の光、希望を神は与えられました。7章から9章 7 節は、その希望、暗闇の中の光についての預言です。

それは四人の子に代表されます。イザヤが、イスラエルの救いの予型となります。彼はくちびるの汚れによって破壊されなければいけない者であったのに、祭壇の火によって聖められます。そして彼は二人の子を生みます。その子の名前には、イスラエルがこれからどうなるのかの徴があります。そして、もう二人の名前が出てきます。一つのインマヌエル、もう一人は長い名ですが、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君(9:6)」です。そうです、神であられながら、人の子としてお生まれになるメシヤご自身が彼らにとって、そして私たちにとって、暗闇の中の一筋の光となります。

1A 御救いの軽視 7

1B 無くなる恐れ 1-9

1 ウジヤの子のヨタムの子、ユダの王アハズの時のこと、アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ペカが、エルサレムに上って来てこれを攻めたが、戦いに勝てなかった。2 ところが、「エフライムにアラムがとどまった」という報告がダビデの家に告げられた。すると、王の心も民の心も、林の木々が風で揺らぐように動揺した。

6 章において、ウジヤが死んだところを読みました。彼の子ヨタムはウジヤがらい病にかかって

から共同統治で治めていましたが、ウジヤの死後、16年の期間、統治をしています。ヨタムは主の目にかなうことを行なっていましたが、ウジヤの生前の時から主から離れていた民は、ますますその滅びへと向かっていました。イザヤは、かつて彼らが主に向かず、指導者に頼っていたため、彼らを取り除かれて、ついに「幼子が彼をしいたげ、女たちが彼を治める。(3:12)」にまでなることを預言していましたが、はたしてヨタムの子アハズは、幼子のような、また女のような統治でありました。

彼がどのような王であったか、少し見てみましょう。歴代誌第二 28 章1節からです。「28:1-4 アハズは二十歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼はその父祖ダビデとは違って、主の目にかなうことを行なわず、イスラエルの王たちの道に歩み、そのうえ、バアルのために鑄物の像を造った。彼は、ベン・ヒノムの谷で香をたき、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の、忌みきらうべきならわしをまねて、自分の子どもたちに火の中をくぐらせた。さらに彼は、高き所、丘の上、青々と茂ったすべての木の下で、いけにえをささげ、香をたいた。」主の前に出ていくことを彼は拒みました。回りは恐れるものでいっぱいです。そこで、自分の弱さを主の前に持っていき、その前でへりくだって、主から力と知恵をいただくべきですが、それを拒みました。自分にプライド、自尊心があるので、それをしっかりつかみながら、自分に役立つものに依存していきましました。それがイスラエルの王たちが拝んだ偶像であり、バアルであり、カナン人の忌まわしい慣わしだったので。

パウロは、幼い信仰を持っていたコリント人たちに、「目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。(1コリント 15:13)」と言いました。今、起こっている状況をしっかり目を覚まして凝視し、それに合わせて持っている信仰に堅く立ちます。それが、男らしさです。度重なる試練や困難に対して、主の前に出ていき、主の前に心を注ぎ、主から聞いて、力を得るとというのが男です。他の何かに依存することなく、主に抛り頼んで人々を率いるのが男らしい姿です。しかし、アハズのその正反対の人間です。

ここに、「アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ペカ」が登場します。レツインは、アラム(シリア)の最後の王で、これからの預言で見るようにアッシリヤの王ティグラテ・ピレセル紀元前 732 年にダマスコを滅ぼします。そして、ペカは北イスラエルの最後から二番目の王です。北イスラエルは、ヤロブアム二世の時に最盛期を迎えますが、彼がいなくなると急速に弱体化しました。しかし、北からはアッシリヤが攻めてきています。それでペカは、レツインと手を組んでアッシリヤに対抗しようとしたのです。そこでユダもこの反アッシリヤ同盟に加えようとして、その王を自分たちの傀儡に代えようと企んでいたのです。

そこで攻め込みますが、ここに「戦いに勝てなかった」とあるように、主が介入されました。その詳しい様子は、歴代誌第二 28 章の先ほど読んだ箇所が続きにありますが、後で読んでみてください。ユダに対して行なったことを主が怒っておられ、彼らは主を恐れ、奴隷とした者たちを返して

さえいます。けれども、再びアラムがエフライムのところまで来ていると聞きました。それで「王の心も民の心も、林の木々が風で揺らぐように動揺した。」とあります。

3 そこで【主】はイザヤに仰せられた。「あなたとあなたの子シエアル・ヤシュブとは出かけて行って、布さらしの野への大路のそばにある上の池の水道の端でアハズに会い、4 そこで彼に言え。気をつけて、静かにしていなさい。恐れてはなりません。あなたは、これら二つの木切れの煙る燃えさし、レツインすなわちアラムとレマルヤの子との燃える怒りに、心を弱らせてはなりません。

「上の池の水道」というのは、エルサレムの町の城壁の外にあるギホンの泉からエルサレムに流れている水道のことです。これからアラムとイスラエルが自分たちを攻めてくると思って、もしかしたらこの水道の部分を偵察に来たのでしょうか。後にヒゼキヤ王が、アッシリヤの攻撃に備えて、町の外にある水源をみな閉じて、地下にトンネルを造り、そしてシロアムの池に流れるようにしました（2歴代 32:30）。それまでは脆かったのです。

そしてここで、イザヤは自分の幼子を連れて行っています。「シエアル・ヤシュブ」という子です。意味は、「**残りの者は立ち返る**」というものです。10章 21 節に、「**残りの者、ヤコブの残りの者は、力ある神に立ち返る。**」とあります。イスラエルの民が、6章 13 節にある、聖なるすえ、切り株になることができるという約束です。この子が、主がしるしとして与える四つの名前の一つ目です。二つの国のことをイザヤは、「**二つの木切れの煙る燃えさし**」と呼んでいます。彼らは、いずれ近いうち滅ぼされる者たちで、事実、732年に二人は死にました。恐れることはありません。

5 アラムはエフライムすなわちレマルヤの子とともに、あなたに対して悪事を企ててこう言っています。6 『われわれはユダに上って、これを脅かし、これに攻め入り、わがものとし、タベアルの子をその王にしよう』と。7 神である主はこう仰せられる。『そのことは起こらないし、ありえない。8 実に、アラムのかしらはダマスコ、ダマスコのかしらはレツイン。——六十五年のうちに、エフライムは粉碎されて、もう民ではなくなる。—— 9 また、エフライムのかしらはサマリヤ、サマリヤのかしらはレマルヤの子。もし、あなたがたが信じなければ、長く立つことはできない。』

「タベアル」というのは、おそらくアラムの地区の名前か人名でしょう。つまり傀儡にしようと企んでいます。しかし、主はそんなことは起こらないと保証しておられます。「六十五年のうちに」とあります。イザヤがいま預言をしているのは紀元前 734 年ですから、その 65 年後は 669 年です。この時すでに、北イスラエルはアッシリヤによって 722 年に滅ぼされていましたが、669 年にはアッシリヤの王オスナパルが、さらに多くの外国人をサマリヤの地域に移住させていたことが、エズラ記 4 章 10 節に記録されています。つまり、ここにあるように「もう民ではなく」なったのです。イスラエル人ではなく、サマリヤ人になってしまいました。預言の言葉はその通りになりました。

しかし、「もし、あなたがたが信じなければ、長く立つことはできない。」と警告しています。主がそ

うしてくださるのに、主に立ち返って、そのことを信じなければ、ユダの国は長く立つことはできないと警告しておられるのです。

2B 主からの徴 10-17

10 【主】は再び、アハズに告げてこう仰せられた。11 「あなたの神、【主】から、しるしを求めよ。よみの深み、あるいは、上の高いところから。」12 するとアハズは言った。「私は求めません。【主】を試みません。」

これは、私たちが聖書を読むときに文字面だけを追ってはいけない、一つの典型的な例です。「主を試みません。」と言っているのは、いかにも霊的に聞こえます。主を試みてはならないとも書いてある、と主が、聖書を引用して悪魔に抵抗されました。けれどもここで言っているのは、全く別のことです。アハブは、イスラエルの神とは全く無縁の生活をしていました。彼は、父ヨタム、また祖父ウジヤが仕えていた神のことは知っていました。けれども彼の反抗心によって、そのような神とは関わりを持たないことを心の中で決めていました。

だからここで、主がイザヤを通して、「あなたの神から、主から、しるしを求めよ。」とアハブに言われているのは、主の憐れみによるものであって、全く関心のない、関わりを持ちたいと願わないアハブに対する語りかけです。かたくなに主を拒む人にも、主が憐れみをかけておられることを示すために、言葉を信じられなくても、しるしをもってなら信じることができるなら、しるしを求めなさい、と問いかけておられます。主がユダヤ人指導者に、「たといわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしが父に在ることを、あなたが悟り、また知るためです。(ヨハネ 10:38)」と言われたとおりです。だからアハブが、「主を求めません。」と言っているのは、「私は神とかキリストとかというものには、関わりは持ちませんから。」と言っているのと同じことです。

13 そこでイザヤは言った。「さあ、聞け。ダビデの家よ。あなたがたは、人々を煩わすのは小さなこととし、私の神までも煩わすのか。14 それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。

ここで、主語が変わっていることに注目する必要があります。アハズ個人に対して語っているのではなく、アハズが代表するダビデの家に語っています。「あなたは」ではなく、「あなたがたは」となっています。アハズがこのようにして主を求めない、その頑なさがユダヤ人指導者に存在しています。そのとき、主自らがしるしを与えられます。それが、「処女から生まれる方」であり、「インマヌエル(神は共におられる)」と呼ばれる方です。これが新約聖書で、イエスの誕生によって成就したことは私たちの知るところです。マリヤが処女であるのに、聖霊によってみごもりました。

処女から生まれるというところに、この方、キリストがアダムの罪を受け継がない聖なる方である

ことを示しています。そして聖霊による降誕ということで、いと高き方の子、神の御子であることを示しています。人でありながら、神ご自身であることを示す預言です。「ことばは人となって、私たちの間に宿られた。(ヨハネ 1:14)」が実現するのです。この小さき子に神の本質の全てが宿っています。ここに希望と慰めがあります。私たちの間で、主は必ず生きた力を示してください。どんなに暗き世であっても、暗闇が打ち勝つことのできない光の力が輝いています。

15 この子は、悪を退け、善を選ぶことを知るところまで、凝乳と蜂蜜を食べる。16 それは、まだその子が、悪を退け、善を選ぶことも知らないうちに、あなたが恐れているふたりの王の土地は、捨てられるからだ。17 【主】は、あなたとあなたの民とあなたの父の家に、エフライムがユダから離れた日以来、まだ来たこともない日を来させる。それは、アッシリヤの王だ。」

15 節を見てください、「この子は」とあります。これは、インマヌエと呼ばれる子のことではなく、今、イザヤが抱いているであろう、シェアル・ヤシュブのことです。そして語りかけは、ダビデの家ではなく、「あなたが恐れている」とアハズ個人に戻っています。悪を退け、善を選ぶことを知るところまで、と言っていますが、物心がつくときまで、ということです。凝乳と蜂蜜を食べるのは、18 節以降に出てくるアッシリヤのユダの侵略によって、作物が育たず、残された家畜の出す乳しか食べるものがない状態になることを、予告するものです。

主は、主ご自身で二人の王を滅ぼされることを御心としておられました。事実、この二年後、732 年にアッシリヤがアラムを攻め、捕え移しました。しかし、アハズは致命的な過ちを犯します。主がして下さることを全く信用せず、自分を守ってくれる者として、なんとアッシリヤ自身を選んだのです。主なる神に信頼するのではなく、強い者に依存しました。列王記第二 16 章 7 節以降に、アハズがアッシリヤに贈り物をして、それでアッシリヤにこの二国を倒してくれるように頼みました。はたして、アッシリヤは彼の願いを聞いれ、それでダマスコを攻め取ったのです。けれども、問題はそれで終わりませんでした。アッシリヤはユダにも進出してきたのです。「2歴代 28:20 アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルは、彼を攻め、彼を悩ました。彼の力にならなかった。」とあります。

3B 凝乳を食べる地 18-25

18 その日になると、【主】はエジプトの川々の果てにいるあのはえ、アッシリヤの地にいるあの蜂に合図される。19 すると、彼らはやって来て、みな、険しい谷、岩の割れ目、すべてのいばらの茂み、すべての牧場に巣くう。20 その日、主はユーフラテス川の向こうで雇ったかみそり、すなわち、アッシリヤの王を使って、頭と足の毛をそり、ひげまでもそり落とす。

アッシリヤをエジプトの川々にいる蠅、蜂の群れに喩えています。そして、ユダの町々を隅々まで倒していきます。それから、「ひげをそり落とす」というのは、当時の男にとってひげは、尊厳そのものでしたから、完全に侮辱することを意味しています。

21 その日になると、ひとりの人が雌の子牛一頭と羊二頭を飼う。22 これらが乳を多く出すので、凝乳を食べるようになる。国のうちに残されたすべての者が凝乳と蜂蜜を食べるようになる。23 その日になると、ぶどう千株のある、銀千枚に値する地所もみな、いばらとおどろのものとなる。24 全土がいばらとおどろになるので、人々は弓矢を持ってそこに行く。25 くわで耕されたすべての山も、あなたはいばらとおどろを恐れて、そこに行かない。そこは牛の放牧地、羊の踏みつける所となる。

土地が荒廃し、作物が育たず、家畜も非常に少なくなる様子を描いています。もう育てる子牛がないので、飲ませる乳が余り、それで多く乳が出ます。他の農産物はなくなるので、人々は野生の食物である蜂蜜を食べて、また乳を固めた凝乳を食べます。

2A 御教えの軽視 8

そして主は、さらに子による預言をユダの祭司を証言に立てて行ないます。確かに、アッシリヤが略奪するというしるしです。

1B 略奪 1-10

1 【主】は私に仰せられた。「一つの大きな板を取り、その上に普通の文字で、『マヘル・シャラル・ハシュ・バズのため』と書け。2 そうすれば、わたしは、祭司ウリヤとエベレクヤの子ゼカリヤをわたしの確かな証人として証言させる。」3 そののち、私は女預言者に近づいた。彼女はみごもった。そして男の子を産んだ。すると、【主】は私に仰せられた。「その名を、『マヘル・シャラル・ハシュ・バズ』と呼べ。4 それは、この子がまだ『お父さん。お母さん』と呼ぶことも知らないうちに、ダマスコの財宝とサマリヤの分捕り物が、アッシリヤの王の前に持ち去られるからである。」

シェアル・ヤシュブに引き続き、主がイザヤに新たな子を与えられました。「女預言者に近づいた」と言っていますが、これはイザヤの妻のことです。そして、ゼカリヤに新たに男の子がエリザベツに与えられた時に、名前をヨハネとすることを書き板に書きましたが、同じようなことをさせていません。そしてそれを読む相手は、祭司です。本来であれば、主に対する祭司として仕えていなければいけないところ、この祭司ウリヤはアハズの命令を受けて、なんとエルサレムの神殿のダマスコにあった神殿の祭壇を作っています(2列王 16:10 以降)。道から逸脱したのは、王だけでなく、祭司も、でありました。

そして意味は、「**早い、略奪、急いで、戦利**」というものです。アッシリヤが、ダマスコとサマリヤの分捕り物をすばやく持ち去ることを示す名前でした。紀元前 734 年にティグラテ・ピレセルはイスラエルの海沿いを南下して、エジプトの国境まで行きます。733 年には、北イスラエルの多くに侵略して、多くを捕え移します。「2列王 15:29 イスラエルの王ペカの時代に、アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルが来て、イオン、アベル・ベテ・マアカ、ヤノアハ、ケデシュ、ハツオル、ギルアデ、ガリラヤ、ナフタリの全土を占領し、その住民をアッシリヤへ捕らえ移した。」この時からガリラヤ地方は

アッシリヤ領となります。そして732年にダマスコが陥落します。早く、略奪、急いで、戦利です。

5【主】はさらに、続けて私に仰せられた。6「この民は、ゆるやかに流れるシロアハの水をないがしろにして、レツインとレマルヤの子を喜んでいる。7 それゆえ、見よ、主は、あの強く水かさの多いユーフラテス川の水、アッシリヤの王と、そのすべての栄光を、彼らの上にあふれさせる。それはすべての運河にあふれ、すべての堤を越え、8 ユダに流れ込み、押し流して進み、首にまで達する。インマヌエル。その広げた翼はあなたの国の幅いっぱい広がる。」

シロアハの水は、ギホンのところにある水です。ソロモンがそこで祭司ツアドクと預言者ナタンに油注がれ王となりました(1列王 1:45)。つまりシロアハの水は非常に少なく、小さいものですが、ダビデ王朝にとって非常に重要なものである、ということです。それをないがしろにして、レツインとレマルヤの子を喜んでいる、つまりダビデの神、主に頼らずに、アッシリヤの王に頼って二つの国が倒れたことを喜んでいる、ということです。しかし、それは束の間の喜びです。アッシリヤからの水はイスラエルにとどまらず、ユダにまで押し寄せてきました。それを翼にも喩えて、ユダ全体に広がっている様子を描いています。

私たち信仰者と呼ばれている者が、目の前に与えられている主の源泉をないがしろにしている姿に通じるでしょう。それは小さな流れであります。しかし、そこにこそ主ご自身の源があります。しかし、人間的な方法、肉に頼り、物事を動かしたら、その時はうまく行くかもしれませんが、しかし、御霊に拠らないので、必ずその大変な結果を招きます。シロアハの水と、ユーフラテスの川の比較です。目の前にあるものは小さく見え、遠くにある世にあるものは大きく見えます。けれども、その頼りにしようと思っている人間的なもの、肉は自分の助けになるのではなく、自分を襲ってきて、自分を苦しめます。

しかし、神は憐れまれます。首にまだアッシリヤという水かさが達した時に、インマヌエルの約束を実現されます。ヒゼキヤの時に、主はアッシリヤを倒されます。そしてダビデの家は、異邦人の勢力の度重なる侵略にも関わらず、それでも残り、インマヌエルなるイエスがお生まれになるようにしていただきました。マタイ1章に、イエス・キリストの系図がダビデの時からヨセフの時まで残っています。

9 国々の民よ。打ち破られて、わななけ。遠く離れたすべての国々よ。耳を傾けよ。腰に帯をして、わななけ。腰に帯をして、わななけ。10 はかりごとを立てよ。しかし、それは破られる。申し出をせよ。しかし、それは成らない。神が、私たちとともにおられるからだ。

この最後の言葉「神が、私たちとともにおられるからだ。」も、ヘブル語ではインマヌエルになっています。ですから、ヒゼキヤの時代にアッシリヤが襲ってきた時に主が共におられるということだけでなく、主がお生まれになる時までユダは滅ぼされないことを教えている箇所です。どんな力あ

る者も、この小さき子の前では太刀打ちできないということです。ルカ 2 章にある、ローマ皇帝アウグストが住民登録をさせ、ヨセフがベツレヘムに行かねばならず、いいなずけのマリヤは臨月でした。けれども、家畜小屋で主がお生まれになりました。このことを天の軍勢が喜び、神を賛美しました。小さき子イエスの前で、ローマ皇帝でさえわななく、つまり自分たちのはかりごとを実現させることはできないのです。すべては神の時計で、神のご計画の通り動いており、この小さな赤ん坊がしるしとなっています。

2B 暗黒 11-22

11 まことに【主】は強い御手をもって私を捕らえ、私にこう仰せられた。この民の道に歩まないよう、私を戒めて仰せられた。12 「この民が謀反と呼ぶことをみな、謀反と呼ぶな。この民の恐れるものを恐れるな。おののくな。13 万軍の【主】、この方を、聖なる方とし、この方を、あなたがたの恐れ、この方を、あなたがたのおののきとせよ。

ここに、イザヤへの神の戒めがあります。6 章の、イザヤの告白を思い出してください。自分はくちびるが汚れた者で、くちびるが汚れた者の間に住んでいる、と言っていました。彼はユダにある不正を糺しながら、自分自身がウジヤ王に頼っていたという、時の流れに従っていた者でした。したがって今、彼は全く時流に抗うこと、みなが謀反と呼ぶことを一緒に謀反というなど言っています。また、民が恐れることをいっしょに恐れてはならないと戒めておられるのです。

私たちは基本的に、他の多くの人々がこうだと思っているものを選んでいきます。そうすれば、角が立ちません。そして教会では、そうした人間的なこと、その常識とは正反対のことを教えることがあります。それが主の教えだからです。しかし、人を畏れ敬うのではなく、「聖なる方」神を畏れ敬います。そうです、セラフィムが聖なる、聖なる、聖なる、と叫んだこの方との出会いの中で、この方が教えとしておられることを選び取ります。それが、皆が考えていることと正反対でも、選び取るのです。

14 そうすれば、この方が聖所となられる。しかし、イスラエルの二つの家には妨げの石とつまずきの岩、エルサレムの住民にはわなとなり、落とし穴となる。15 多くの者がそれにつまずき、倒れて砕かれ、わなにかけられて捕らえられる。

私たちは主を聖なる方とすること、畏れ敬うことで、主ご自身の聖所を楽しむことができます。主が共におられること、インマヌエルを知ることができるのです。けれども同時に、信じない者たちにとっては、主の聖所となるべきその臨在が、つまずきの岩、また捕らわれる罠となっていきます。ただ、ここで信じないという者は、本来なら信じているはずのイスラエルとユダの家です。そして、神の宮のあるエルサレムの住民です。信じていると言われている者が人間的な考えを選択する時、つまずきます。私たちがいかに主を恐れ、この方の臨在に守られる必要があるかを思わされます。

16 このあかしをたばねよ。このおしえをわたしの弟子たちの心のうちに封ぜよ。」

あかしと教えです。主の語られる言葉、その教えこそが私たちを守ります。この方の教えを守る弟子となる時に、主はご自身のことを現してくださいますが、他の人たちには分からなくなります。先に、「確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決して悟らない。(マルコ 13:14)」と言われたとおりで、イエス様が弟子に言われたとおりです。こうやって、主は悟る者と、悟ることができなくなる者へと選り分けられるのです。

17 私は【主】を待つ。ヤコブの家から御顔を隠しておられる方を。私はこの方に、望みをかける。
18 見よ。私と、【主】が私に下さった子たちとは、シオンの山に住む万軍の【主】からのイスラエルでのしるしとなり、不思議となっている。

イザヤの告白です。どんな目に見えるしるしを認められなくても、それでも主を待ち望みますと告白しています。状況が困難になっていても、私はキリストにこそ望みをかける、という告白です。そして、見えないので信じます。目に見えているものに頼らず、目に見えないところを信じて望みをかけます。そして今これらのことは、「ヤコブの家から御顔を隠しておられる」とあるように、不信仰に陥っているイスラエルには見えなくされています。

けれども、今、二人の子がイザヤに与えられました。間もなく主は事を行われることを、「残りの者は立ち返る」という名のシェアル・ヤシュブ、そして、「早い、略奪、急いで、戦利」という名のマヘル・シャラル・ハシュ・バズがしるしとなっています。そして「不思議」ともなっています。不思議とは、私たち人間の思いもつかないこと、その理解をはるかに超えて事を行われるので、不思議であり、神ご自身に属する特徴です。

19 人々があなたがたに、「霊媒や、さえずり、ささやく口寄せに尋ねよ」と言うとき、民は自分の神に尋ねなければならない。生きている者のために、死人に伺いを立てなければならないのか。20 おしえとあかしに尋ねなければならない。もし、このことばに従って語らなければ、その人には夜明けがない。

主の教えとは、聖霊によって私たちの霊に語られ、私たちの霊を清め、強くし、揺るがないものにしてくれます。けれども、そこには絶えず、自分が碎かれる体験、へりくだりが必要です。自分というものをしっかりと持っている時、何とかしてそれを守るために、神以外のもので不安を補おうとします。それが、霊媒や口寄せなどです。私たちは、占いなどに頼ることはないでしょう。けれども、神の言葉ではそうではないとはっきりと教えていることを、「そうでいいんですよ」という囁きは周囲の至るところにあります。それがキリスト教の教師と呼ばれる人々からも聞こえます。私たちの気分がどんなに害されようと、どんなに傷つこうと、主の言葉こそが傷ついた魂を癒し、平安をもたらします。これから離れては夜明けがない、つまり暗き世に光を見出すことができないのです。

21 彼は、迫害され、飢えて、国を歩き回り、飢えて、怒りに身をゆだねる。上を仰いで自分の王と神をのろう。22 地を見ると、見よ、苦難とやみ、苦悩の暗やみ、暗黒、追放された者。

主の教えに聞き従わないユダヤ人は、ここに書かれている迫害と困難、敵の怒りを受けてきました。北イスラエルはアッシリヤによって滅ぼされ、ユダはバビロンに滅ぼされます。そしてペルシヤに変わって帰還はしますが、周囲の住民に虐げられます。そしてギリシヤの時代は、その王たちに踏み荒らされました。それから、ローマがやって来て、ローマに媚びるヘロデ王が台頭して、彼らをさらに虐げるのです。

3A 暗闇の中の光 9:1-7

このような苦しみを見る時に、私たちは気を失いそうになります。本当に希望があるのか、と思います。しかし、希望を失いそうになるとき、むしろ人間的な期待がなくなってしまう時に、その時にまことの光が輝くのです。イエスは、イスラエル人にとって異邦人による苦しみの真ただ中にいるユダヤ人のところに来てくださいました。

1 しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。2 やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。

先に、北イスラエルのペカの時代に、ガリラヤにいる者もアッシリヤに捕え移されたことを読みました。ゼブルンとナフタリの割り当て地のところ、そこがガリラヤです。そして、「海沿いの道、ヨルダン川のかなた」とありますが、海沿いの道とはヴィア・マリスと呼ばれる、エジプトから地中海沿いの道を北上し、ダマスコ、そしてユーフラテス上流にまでつながる国際幹線道路であります。それが、ガリラヤ地方、特にガリラヤ湖畔のカペナウムを通過して、それからダマスコにつながります。カペナウムの少し先にヨルダン川があります。まさに、そこに住む者たちに光栄が来るといふ預言です。私たちの愛する主イエス、この方はガリラヤで育ち、ここで宣教活動をなされることで、イザヤの預言を成就されました。

3 あなたはその国民をふやし、その喜びを増し加えられた。彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。4 あなたが彼の重荷のくびきと、肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、ミデヤンの日になされたように粉々に砕かれたからだ。5 戦場ではいたすべてのくつ、血にまみれた着物は、焼かれて、火のえじきとなる。

イエスが宣教されることによって、多くの者に喜びが加えられました。しかし、国民が増える、虐げる者のくびきから解かれるということは、霊的には行われましたが、未だ成就を見ていません。当時のユダヤ人たちは、このような預言があったので、エルサレムにイエスが向かわれる時に、

当時の異邦人の勢力、ローマを打ち砕いてくださると思っていました。特に、ギデオンがミデヤン人を三百人で倒した時のことが言及されています。ですから、武力をもってローマを倒すという熱心党员もユダヤ教の中には存在したのです。

ここが預言の難しいところです。主はルカ 24 章で、「すべての預言者(25-27 節)」と強調され、一部の預言だけでなく全体を眺めなければいけないことを解き明かされました。主が苦しみの僕として、罪を負われることが他方に書かれています。主は再び来られます。その時にこのことを行われます。けれども初めに人の子が苦しみを受けて、三日目によみがえり、罪の赦しを得させる悔い改めを弟子たちが説くようにされたのです。

6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。

ここに、四つ目の子の名が出てきました。イザヤの二人の子以外に、メシヤ・イエスご自身を示す「インマヌエル」がありました。そしてここに、メシヤ・イエスのもう一つの名が書かれています。6 節は日本語訳には上手に出ていませんが、「人の子として生まれたが、神によって生まれた御子」という、人であるのに神であるということがはっきりと宣言されています。「ひとりのみどりご」はその通りです。肉体をもって赤ん坊が生まれます。そして、「ひとりの男の子が、私たちに与えられる。」というのが、御子が与えられると訳すことのできる部分です。

ゆえに、その名前は父なる神と同一になっています。「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」であります。初めに、「不思議な助言者」とあるのが大事です。先ほど説明したように、私たちの及びもつかないところで神がご計画を実現されます。だれが、赤ん坊から世界を救うという計画を立てていると思うでしょうか？そして、王室ではなく貧しい家庭から生まれ、そして、ガリラヤという片田舎で宣教をして、さらにローマへの反乱を鎮めるために極刑にする十字架刑に処せられると思っているのでしょうか？ましてや、誰が死者の中からの甦りをするなど考えられるでしょうか？これがあまりにも不思議なのです。もともと福音は変、奇妙なのです。

しかし、その中に神がおられます。次に、「力ある神、永遠の父、平和の君」とあります。十字架という弱さに中にこそ、神の力があります。人を救う神の力があります。そして、永遠を知ることができます。永遠の昔から永遠の御国にまで御心を持っておられる御父を知ることができます。そして、私たちに平和をもたらす、君となってくださいているのです。国の政策によって平和と安全をもたらそうと必死になっているとき、それでもイエスご自身こそが平和であり、十字架において敵を打ち壊してくださったと信じる時、そこに思いを超えたところの平和が造られます。

そして 7 節は、再び再臨後のキリストの働きです。主はダビデの子として生まれました。けれども、十字架につけられ、よみがえられ、天に昇られて、今、父なる神の右の座に着いておられます。この方が地上に戻られます。エルサレムに戻られます。その時に、ダビデの家を回復されます。そこにある神殿に王座を設けられ、王として祭司として、世界を治められます。そして、正義のさばきを行われ、平和で世界を満たされるのです。

そして、「万軍の【主】の熱心」がそれを成し遂げるとあります。主は熱意を持っておられる方です。世の中を、神の民を斜めで見ているような方ではありません。今は、普通であること、情熱はほどほどにしてエコ運転で生きようとする時世です。けれども、それでキリスト者は神の召しに応えることはできません。悪霊どもは、イエス様に対して「私たちが放っておいてください。(ルカ 4:34 別訳)」と言いました。これが、主イエスが生活に介入される時に叫び出す悪霊どもの叫びなのです。「生きるのはキリスト、死ぬのもまた益です。」とパウロが言ったとおり、情熱のないクリスチャン生活はあり得ません。

こうして、私たちは「子によるしるし」の箇所を読みました。イザヤの二人の子、そしてメシヤご自身の誕生を表す呼び名二つです。思えば、ヨセフとマリヤが乳飲み子イエス様をエルサレムに連れてきた時に、シメオンがイスラエルの慰めをこの子に見ました。イスラエルの救いが来た、と彼は言いました。こんな小さなところに、世界を救う希望がありました。私たちにも、それは若枝のように、出てきた芽のように小さな働きかもしれません。けれども、それがいかにちろちろと流れる水のように見えても、しっかりと主につながってください。人間的な方法に傾かないように、主から戒めを受けてください。主を聖なる方とし、恐れ、その教えによって神のご計画が知らされる弟子となってください。